

関東学院中学校高等学校

「チョコレートボックス」のような学校で 小さな平和を積み重ねる

森田祐二 校長に聞く

元ラガーマン・経営者 立石 哲也の
体当たりインタビュー

塾経営者の立石氏が、会いたい人に会いに行き、教育・入試について率直な言葉を投げかけて対話する「体当たりインタビュー」。今回は、関東学院中学校高等学校の森田祐二校長先生をお訪ねしました。名古屋から横浜に赴任し、キリスト教主義教育の伝統を守りながら、学校改革に邁進する森田校長。広大なキャンパスに響くマーチングバンドの音色、地下の陶芸窯、ノーベル賞受賞者を招く特別講演、イートン・カレッジとの国際交流——「チョコレートボックス」と呼ばれる多彩な教育の魅力を、たっぷりと語っていただきました。



森田祐二（もりた・ゆうじ）

関東学院中学校高等学校校長。名古屋中学校・高等学校で教員・校長を歴任後、関東学院に着任。英語科教員。クリスチャンホームに育ち、プロテスタントの信仰を持つ。教育ビジョン「OLIVE STREAM」を掲げ、学校改革を推進。イートン・カレッジとの国際交流、有識者招聘プロジェクト「Wisdom and Wonder Project」などを次々と立ち上げ、受験生の大幅増加と進学実績の向上を実現している。趣味はロック音楽。

戸惑いましたね。ただ、共学校には共学校の良さがあります。後でお話する「小さな平和」の理念は、多様な生徒がいる環境の方がより深く伝わると感じています。男子だけの時とは違って、いろいろな価値観が交差する中で、「他者を認めてともに生きる」というメッセージがより切実に響くんですよ。

英語は週に「会話三時間」。

ベルリッツ導入で「ビビらない」英語力を育てる

立石 関東学院の英語教育について教えてください。

森田 ここに来て英語の授業数の多さに驚きました。教科書を使った文法・長文の授業が五時間、ネイティブ教員の英会話が一時間それに加えてベルリッツ——世界百四十以上の国と地域で語学教育を展開している外資系の語学スクールなんです——その講師による英会話が二時間あります。さらにクラスを三分割して行うことで、きめ細かな指導が可能になります。

立石 文法と会話がうまく連動しているんですね。

森田 ええ。日本人教員が文法をしっかり教え、その土台をもとに、ネイティブの環境で実際に使ってみる。この往還があることで、理解したことが定着し、「使える英語」へとつながっていきます。点数だけでなく、実際に使える力を育てることができるので、生徒たちの英語に対する「ためらい」も自然と薄れていくのです。英語は本来コミュニケーションのツールですから、文法と会話を結びつけ、触れる機会を豊富にすることで、聞く力や話す力も無理なく伸びていきます。

立石 やはり実際に使う機会が多いと、学ぶモチベーションも変わりますよね。

森田 そうなんです。生徒たちには本気で世界に出てほしいと思っていますから。日本はパスポート所持率が十七パーセント程度しかない。韓国が五十パーセント、台湾が六十パーセントですから、圧倒的に少ない。外国人がたくさん来てくれて「日本はいいね」と言ってくれることに満足してしまいがちですが、実際に自分が行かないとわからないことはたくさんあるんですよ。

進路指導の改革。

東大三名合格を支えた指導力

立石 進学実績も伸びていると聞いていますが、進路指導はどのように変わったのでしょうか。

森田 私が来てから、進路指導の体制を立て直しました。県立の進学校で実績を上げてきた教員を招聘して、進路指導の中核を担ってもらっています。高校一年時から月に一度、進路集会を開き、自らの望む進路にかなう学習や補習の必要性を継続して伝えています。その結果、今年は東大に三名合格しました。三人受けて三人合格ですから、指導の精度が高い。

立石 三分の三というのはすごいですね。

隠されていた「宝」を発信。

受験生が五百人増えた「OLIVE STREAM」の衝撃

立石 偏差値も上昇しているとお聞きました。何がきっかけだったのでしょうか。

森田 来てみて感じたのは、本校の良さをちゃんと発信できていないということでした。ずっとという先生方には当たり前のことが、外から来た僕にはすごく魅力的に映った。地下に陶器の窯があつてろくろも回せるとか、韓国語・中国語の講座を二十年以上続けているとか、見事な茶室で誰でもお茶を学べるとか。教養講座で華道を学んで、ずっと続けるとお免状がもらえる仕組みもあるんです。将来海外に出た時に、日本の文化を自分のアイデンティティとして説明できる力になりますよね。

立石 それを一つのビジョンにまとめたわけですね。

森田 はい。「OLIVE STREAM」という教育コンセプトにしたんです。STEAM教育にR（Religion＝宗教教育）を加えた造語ですね。学校説明会や学習塾へこの学びの魅力を伝え、一気受験生が五百人増えました。卒業した高三と入学した中一では偏差値が十近く違って、教員も「別の学校になっている」と言うくらいです。

立石 東京からの受験生も増えているとか。

森田 ウェブサイトのアクセス解析を見ると、当初は川崎や藤沢、横須賀といった横浜近隣地区が中心だったんですが、

interview

今は世田谷区、渋谷区、港区などの閲覧数もかなり増加しました。やはり東京の学校はどうしても狭い学校が多いですから、のびのび六年間過ごせる環境は魅力の一つだと思います。通学も下りの電車で混まないですね。

「チョコレートボックス」の学校。

マーチング、ハンドベル、フラ甲子園、
技術部の車づくり

立石 部活動の多彩さも関東学院の魅力ですよ。

森田 学校規模が中高合わせて約千五百人で、そのうち約二百五十人が音楽系クラブに所属しています。六人に一人が音楽をやっている計算です。オーケストラが約五十人、日本初のマーチングバンドクラブであるマーチングバンドが約八十人、ハンドベルが二十数名。僕が来てから校舎の入り口にストリートピアノを置いたんですが、朝七時半前から弾いている子がいて、もう賑やかですよ。

立石 ダンス部は「フラ」で全国優勝もされたとか。

森田 フラガールズ甲子園はハワイアンズもある福島県いわき市が会場となりますが、本場ですから福島の高校が圧倒的に強いのですが、見事に優勝してくれました。

立石 技術部の車づくりも面白いですね。

森田 学年ごとに一台ずつ車を作って、ホンダのエコマイルチャレンジに出場しています。ガソリンーリットルでどれだけ走れるかを競うんですが、中学生が溶接までやるんですよ。最初はリタイアして悔しい思いをしながら、だんだん車の性能が上がっていく。まんが甲子園にも出場していますし、本当に選択肢が多い。

立石 だから「チョコレートボックス」なんですね。

森田 ええ。ゴディバやピエール・マルコリーニみたいな、少し品の良いチョコレートボックスを開けたら、いろんな味が入っている。こっちの味が合わなければ、別の味を試せばいい。中高生のうちにできる失敗なんて全く怖くない。ただし、人を傷つける失敗だけはダメだよ、ということは必ず伝えていきます。

ノーベル賞受賞者が来た日。

生徒たちの「止まらない質問」

立石 各界の有識者を招く特別講演も始められたそうですね。

森田 「Wisdom and Wonder Project」と名付けたプロジェクトです。まず卒業生でプリツカー賞——建築のノーベル賞と言われる賞ですが——を受賞された建築家に全校生徒の前で講演をお願いし、それを定例化していこうと。今年の



二月には二〇一五年にノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章先生に来ていただきました。

立石 生徒さんの反応はいかがでしたか。

森田 質疑応答がもう止まらなくてね。男子も女子も関係なく手が上がって、感心しました。研究の話そのものも面白かったんですが、「諦めずに疑問を持ち続けることがどれだけ大切な、それは君たちにも当てはまる」という話が響いたようです。講演後、控え室にまで質問に来る子がいたんですよ。

立石 控え室にまで！

森田 高校生の女の子が二人来て、「梶田先生の初版本を持ってきました。サインをください」と。お母さんがノーベル賞を目指している研究者らしいんですね。次に来た高校二年の男子が「自然科学の分野は神の存在と相反する部分があると思いますが、先生は神の存在を信じますか」と聞いたんです。梶田先生はニコニコしながら「突き詰めていったら、わかるかわからないかしかない。わからなかったら、それが神様のおかげだと考えるかどうかの二つしかないんだよね」と。「こんな質問は初めてだ。さすがクリスチanskूलですね」と喜んでくださいました。次は宇宙飛行士の野口聡一先生に来ていただく予定です。

イートン・カレッジとの交流。

世界最高峰のパブリックスクールとの絆

立石 海外との交流も盛んですね。特にイートン・カレッジとの交流について詳しく教えてください。

森田 名古屋にいた頃からイートン・カレッジとの繋がりがあったんです。イートンは言わずと知れたイギリスの名門パブリックスクールで、王族や貴族の子弟が通う学校ですね。生まれた時に登録するような世界で、学費も年間一千三百万円ほどかかる。アジアの王族の息子が来ていたりもします。関東学院に来てから「ぜいうちの生徒も受け入れてほしい」

とお願いして、少しずつ交流を広げてきました。

立石 どのような形で交流されているんですか。

森田 夏に二十人ほどの生徒を連れてイートンに行っています。何度もお願いして、少しずつ受け入れ枠を広げてもらったんです。うちの子たちにとっては、世界最高峰の環境で学ぶ経験は本当に大きい。

立石 イートン側から関東学院に来ることもあるんですか。

森田 先日、イートンの聖歌隊が四十人来てくれたんです。十三歳から十八歳の男の子たちで、これはもう何かあってはいけないと、こちららも必死で受け入れ準備をしました。イートンの音楽監督もうちのオーケストラを聴いて本当に感心してくれましたし、何より印象的だったのは茶道部の生徒たちの活躍です。うちの茶道部が出てきて、日本の茶道の歴史や作法を全部英語で説明したんです。お菓子を食べて抹茶を飲んで、「甘すぎるし、苦すぎる」なんて言っていましたけど（笑）、茶室のものにはすごく興味を持ってくれました。

立石 英語で茶道を説明できるというのは、まさにグローバル教育の成果ですね。

森田 まさにそうなんです。ベルリッツで鍛えた英会話力と、教養講座で身につけた日本文化の知識が一つに結びついた瞬間でしたね。宗教教育を通じて他の文化への敬意を学んでいるからこそ、自分たちの文化も誇りを持って説明できる。イートンの生徒たちとの交流は、まさにそういう力が試される場なんです。

立石 イートンとの交流は今後も続いていくんですね。

森田 もちろんです。こうした繋がりは一朝一夕にはできませんから、大切に育てていきたいと思っています。イートンに限らず、オーストラリア・カナダへの三ヶ月間のターム留学や、二週間から三週間の短期研修もたくさんやっています。海外の大学に進学する生徒も多くなってきました。

帰国生入試の拡充と関内の新拠点。

首都圏の可能性を広げる

立石 帰国生入試にも力を入れているとか。

森田 関東学院では今まであまり帰国生入試に注力できていませんでしたが、三年前に制度を改めたところ出願が多くなってきました。名古屋時代からトヨタグループの企業と繋がりを持っていて、海外赴任から帰ってきたご家族のお子さんを受け入れる実績を積んできたんです。東京の学校では二百人超の受験生を獲得している学校もありますから、まだまだマーケットはあると思っています。今年東大に合格した一人は帰国生なんですよ。

立石 関内にも新しい拠点ができたそうですね。

森田 JR 関内駅前に「ベースゲート横浜関内」という三十三階建ての新しいビルができてまして、十二階が関東学院のフロアなんです。本学の高校生が利用できる自習室があり、窓からは横浜スタジアムも見えます。プロ野球を観戦しながら学習できるかもしれません（笑）。すでに多くの本学生徒が自習に通っています。大学の関内キャンパスを利用することもでき、自校・関内の双方でこれだけ学習環境が整っているのは、本当に恵まれていると感じます。

宗教を「教養」として持つこと。

「小さな平和」を積み重ねるキリスト教教育

立石 キリスト教主義の学校ですが、宗教教育の意義をどうお考えですか。

森田 僕は子どもたちを本気で世界に出したいんです。その時に、宗教を「教養」として身につけているかどうかは大きい。信仰があればなお良いですが、宗教は教養でもあるんです。



立石 哲也

1975年生まれ。現在、東京都、神奈川県で個別指導塾を運営。教室運営の傍ら、「子どもたちに幅広い選択を！」という想いから、ONETES株式会社で教育統括コネクターで活動中。現在は YouTube 動画、合格ONEテスト (旧 合判模試) 「偏差値 5 を上げる」に出演。また、この対談記事を 5 年間まとめた本を Amazon kindle 版で絶賛販売中！！



元ラガーマン・経営者
立石哲也の体当たりインタビュー
著者：立石 哲也



キリスト教を六年間学ぶことで、ユダヤ教やイスラム教、仏教といった他の宗教の歴史や精神性も自然と学ぶことになる。アメリカに行けば七十五パーセントがクリスチャンで、わんぱくな子だって日曜日に教会に行かされる。イスラム教が決して乱暴なものではなく、厳しい戒律の中に深い精神性があることもわかる。そうした教養を持てるかどうか、海外で生きていく上で大きな力になるのではないかと考えています。

立石 最後に、森田先生が目指す教育とは何でしょうか。

森田 クリスチanskूलとして、教育の目標はやはり「社会貢献」です。他者と力を合わせて社会に貢献できる人物を育成したい。世界では戦争が起こり、子どもたちだけでは解決できないことがたくさんある。でも大きな平和を実現するためには、小さな平和を一つ一つ積み重ねるしかないんです。友人に思いやりを持つこと、挨拶をすること——挨拶とは「あなたのことをわかっていますよ」と相手に伝えることなんです。それは他者を大切に思うことに繋がる。お父さんお母さんに優しくすること、兄弟に優しくすること、それも全部一緒なんです。その上で、東大にも行ける、好きな部活も頑張れる、前向きに取り組める子を育てたい。

立石 変わらないものと、変えるべきものがあると。

森田 他者愛、サーバントの精神——これは百四十年変えていないことです。でも学校経営は企業と同じで、変えるべきところは変えないといけない。社会が変化しているのに学校が変化しなかったら、社会に有為な人物を輩出できない。現状維持は後退と同じだと、自分にプレッシャーをかけて続けています。

立石 小さな平和を積み重ねながら、変革も恐れない。関東学院のこれからが楽しみです。本日は貴重なお話をありがとうございました。

森田 こちらこそ、ありがとうございました。

【取材後記】

取材を終え、校長室を出ると、森田校長はそのまま一緒に歩き始めた。広いキャンパスの廊下を並んで歩きながら、すれ違う生徒一人ひとりに声をかけていく。校門まで来てても立ち止まる気配はなく、最後は校門の外まで出て、こちらの姿が見えなくなるまで丁寧に見送ってくださった。その背中に、この先生が大切にしている「小さな平和」の実践を見た気がした。イートン・カレッジの聖歌隊に茶道を英語で説明する生徒たち。ノーベル賞受賞者に「神の存在を信じますか」と問いかける高校生。エコカーを溶接する中学生。関東学院の「チョコレートボックス」から飛び出す子どもたちの姿は、どれも生き生きとしていて眩しい。一人ひとりの個性を大切にし、その可能性を最大限に伸ばしていく——関東学院はまさにそういう学校だ。名古屋で築いた実績も人脈も手放し、「神様の導き」を信じて横浜にきた森田校長。「失敗していいんだよ」と子どもたちに伝え続けるその姿勢は、まさにクリスチanskूलの校長としての矜持そのものだろう。関東学院の新しい物語は、まだ始まったばかりだ。